

噂々

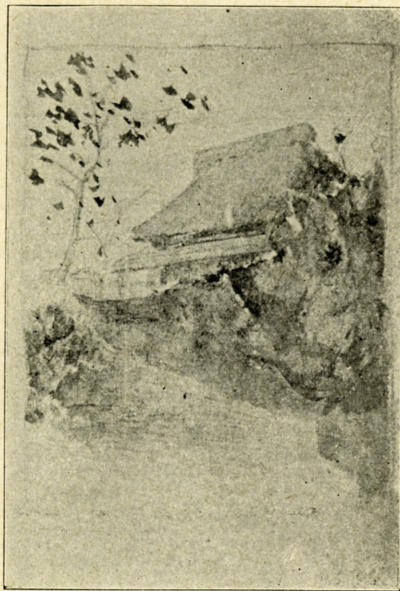
懸賞繪ハガキを見て

やぶくぢす

▽この間催された、日本葉書會の、懸賞繪ハガキ選評の時に感じたことを、少し饒舌つて見やう、言ふ迄もなくこれは僕一個の考てはあるが、應募者には多少他日の參考にもなるであらうと思ふ。

▽どんな繪が當選するであらうか？僕の見るところでは、餘りに奇抜に過ぎてはいけぬ。無論平凡でもいけぬ。際立つて善くなくても、誰にでも好かれるやうなものが、多く入選するやうである。

▽選者の數が多いと趣味が一致しない。従つて甲がよいと思つて十點を入れても、乙が二三點しか入れなければ、甲乙共七點宛入れた、比較的平凡なものが高位置を占むる譯である。それ故委員の數の多い時は、存外滿らぬものに月桂冠を與ふことになる。▽それで、當選すべき繪を知るには其反對にどんなものが排斥されたかを見る方が早いから左に其例を示さう。



澤田四郎氏着色筆錦筆スツクス

▽第一、調子の弱いもの。此種のもの多敷陳列された時人の目につかぬ。一枚々々手にとつて見れば存外佳良なもので、並べると力も勢もないため、見ずばらしいものになる。それゆへ線の弱い日本畫は最も不向である。淡彩もいけぬ。場面を充分利用しないで、隅の方に小さく片よつたのなども頗る損である。

▽第二、意匠の古いもの。

白鳥(スワン)や、メーポー式や、一層下つては月に兎とか、春雨傘に花びらとか、このやうな陳腐な趣向のものは、たとへ繪が上手であつて、色が整つてゐても、古い！といふ一言で排斥されてしまふ。

▽第三、模倣らしきもの。

隨分奇抜な意匠でも、どこかにお手本がありさうな疑ひのあるもの、又は舶來にありさうだといふやうなものは選に入らなかつた。尤も中には甚しいのがあつて、みす／＼委員の人の、曾て描いたものを其儘借用といふのもあつた。かゝる種類の繪の中には、眞に自分の趣向から出來たものも必ずあるに相違ないが、外形が舶來臭いと、嫌疑を受ける爲め氣の毒である。

▽第四、時局に關係せしもの。 絶對にいけぬといふのでは

ないが、よほど傑作でなくては注意を惹かぬ。總じて際物的のもの、高い好尚に適應せぬものゆへ、多大な力を用ふるは骨折損であらう。

▽第五、色の俗悪なるもの。 即ち色の幼稚なるもので、金銀

や、赤とか緑とか、華々しい色を澤山塗りたてた、けばくしいものである。そのやうな強烈な色を、よく調和させるとは、中々困難な仕事で、失敗は免れぬ。併し、あまりに高尚ぶつて、濛い色許りて仕上たのも、共にいけなかつたらしい。

▽第六、不自然なるもの。 遠近法や陰影の間違ひの不可なるは勿論のとして、委員中の日本畫家連には考證論さへ出た位いてあるから、歴史的人物など描くには、此點にも注意を要するのである。

▽數へ立ればまた澤山あるが、要するに趣向が奇抜で、圖柄が高尚で、且其取材は日本的に、色彩は強くしておちつきあり、全體の調子がよく引締つて整つてゐて、誰れの注意をも惹くとの出来るやうに描けば、當選疑ひなしである。

* * * * *

夜の誓古

よ ち

私共待ちにまちたる好時節到来、山に紅葉をさぐるもよく、水に蘆花を寫すもよく、こゝ二ヶ月の間は彩筆ことに忙しかるべく候。かく我等の喜び狂ふに引かへ、君には日に／＼に晝の間短かくなりゆくに、勤めある身には三脚たつるひまも殆どあらじと啣ち給ふ。實に常日頃この道のみ楽しみ給ふ君の御事とて嗚々口惜しくも思召さるべく存候。近頃は朝の一時間夕の半時間を僅に寫生に慰め給ふよし、御勉強のほど我等の切に耻入るところに御座候。思ふに曉、夕の風は膚に寒かるべし、さばれ清く澄める空の色は秋の朝に於て見るべく、霧こめてしめやかに樹も草も消えては現はるゝ露けきありさまは、秋に於て尤も美はしかるべく候。ことに夕陽の雄大にして色も形も變化に富めるは、ひとり此季節に於て見るべく、此際に於て朝夕の御研究は、たとへ僅かの時間なりとも益する處極めて大なるべしと存候。猶夜ながのつれ／＼を空しく送り給はじとなれば、一二時間墨繪の御研究もよろしかるべきか、墨繪なれば、鉛筆にても木炭にても、燈の下にて充分描き得べく候。また毛筆練習のため彩畫をとの思召に候へば、セピア、ニエトラルチント、其他何にても強き暗き色にて、一色畫を御試みに相成候はゞよろしかるべく候。寫生の材料は、最初は可成一色のもの、假令ば素焼の壺とか鐵瓶とかを選び、形と陰影を極めて正確に寫し、其調子を悟り、漸々色の多種なるものに及ばざるべく候。